

屋久島経済開発 調査団に参加して

原 田 種 成

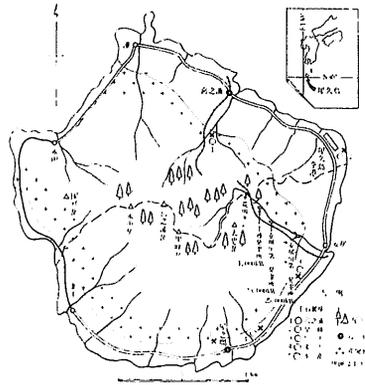
去る6月12日から6日間にわたり福岡通産局長橋口隆を団長とする民間学識経験者および福岡通産局関係ならびに鹿児島県職員からなる約40名の調査団が第1班(電源開発) 第2班(工業立地) 第3班(地下資源)資源)にわかれ各班は屋久島開発に関する既存の資料を収集し現地においては同島の現状および開発の問題点について概況調査を行なった。ここで南海の秘境といわれている屋久島の概要についてふれてみよう。

屋久島は鹿児島県佐多岬の南方約70kmにある離れ島で面積は500km²余り淡路島よりやや小さく周囲は約100km人口およそ25,000人で木材・甘藷・砂糖・黍を主とする農業を生業とする島民からなり気度はかなり低いようである。

この島の特色は山岳の重畳していることと雨量の多いことである。島のほぼ中央部には九州第1の高峰宮之浦岳(1,935m)がそびえ1,800m以上の黒味・永田・太忠の各岳が連峰をなし最近では登山ブームによりこれらの山々に多くの若者が登るようになった。気候は垂直的には熱帯から寒帯までであることになるが海岸周辺は亜熱帯性で東南部台地にはバナナ・パイナップル・ボンカン等が栽培されている。山岳地帯には高山植物が茂り5月ごろまで残雪がある。海拔600m以上には樹齢3,000年前後を経過した有名な屋久杉が原始林をなし猿・鹿などが棲息している。雨量はきわめて多く「月の35日は雨が降る」といわれ海岸地帯では年3,000~4,000mm山岳地帯では年7,000~10,000mmといわれている。われわれ調査団も青空をみたのは全期間を通してわずかに数時間足らずであった。

行政区は島の北半分が熊本郡上屋久町で役場は宮之浦にあり南半分は屋久町で役場は尾之間にある。

本島の地質は中生代の砂岩・粘板岩とこれを貫く粗粒黒雲母花崗岩からなり分布は島の東北から東南の緩傾斜地帯に中生層がありその他の地域は花崗岩である。花崗岩にはきわめて粗大な長石の結晶が特長的に含まれている。屋久島の地下資源としては重石が有名である。重石は花崗岩に成因の関係をもつ石英脈にともなっている。鉱床型式は宮久三千年氏らによって次のように二大別されている。



屋久島
概要見取図

1. 安房型鉱床

島の東域に主として分布する安房砂岩を母層とするもので鉱床は平行脈ないし網状脈群とその中間性のものからなり脈幅は5cm~数10cm延長最大300m鉱物共生は比較的少なく石英・電気石・鉄燐重石からなっている。鉱山は仁田・向陽・早崎などがこの型に属する。

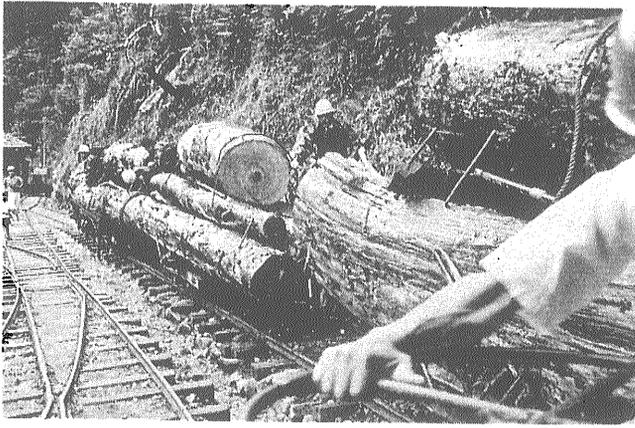
2. 尾之間型鉱床

島の北部および南部に多く境界部またはそれに近い花崗岩中に発達し平行脈群からなり不規則に分岐することがあるが網状脈を形成することはきわめて少ない。鉱脈は安房型に比べると小さいがしばしば高品位であることが特長的でありまた共生鉱物も多い。鉱山としては本富・麦生・宮之浦などがある。

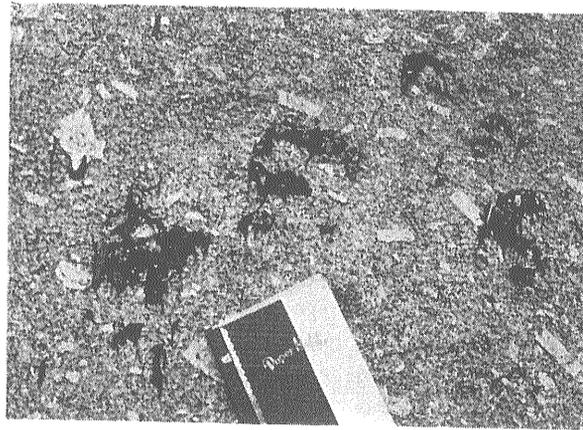
鉱脈は一般に島の中心部を中心とする同心円状に発達し傾斜は中心部に向かって40°~60°を示していることは興味深い現象である。

本島の重石鉱業は明治44年(1911)は仁田鉱山が発見され昭和19年(1944)には精鉱65トンを産出した実績があったがその後あまり産出せず朝鮮動乱によりまた急増し28年(1953)には精鉱41トンに達した。32年(1957)ころから市況の悪化により現在は本島内の鉱山はほとんど休止している。重石以外の鉱業では砂鉄があり昭和33年(1958)楠川において約4,500トンの精鉱が産出されたが現在は中止されている。しかし楠川~宮之浦~湊間の海底に砂鉄の賦存が考えられるので今後の調査が期待される。また珪石・長石が各所で発見されつつあるからこれらのものも日の目を見ることが近いものと思われる。

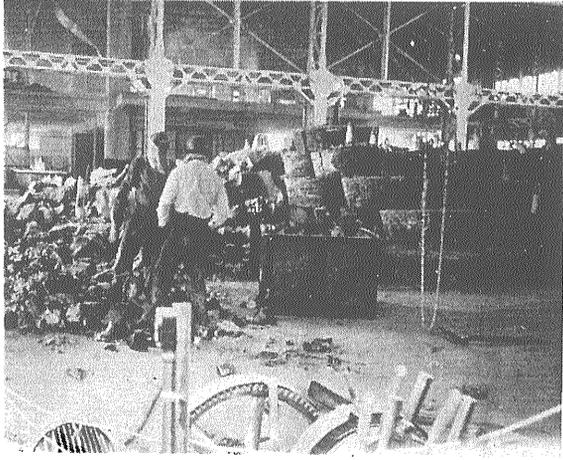
本島はきわめて急峻な地形をなし資源調査がはなはだ困難でありまた輸送施設が不備であるから調査開発がおくっていたものである。今後屋久島の総合開発によりこれらの立地条件が改善されれば地下資源の発見・開発も容易になり「宝の島屋久島」も時代の波に乗ることができるであろう。(筆者は福岡駐在員事務所)



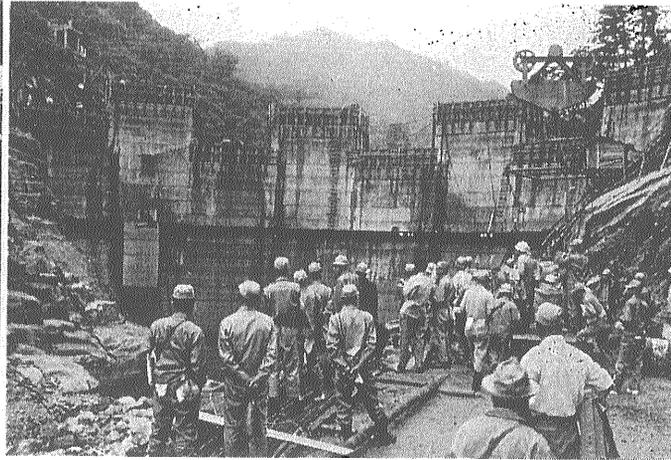
屋久杉の切り出し (小杉谷にて)



花崗岩中の長石結晶



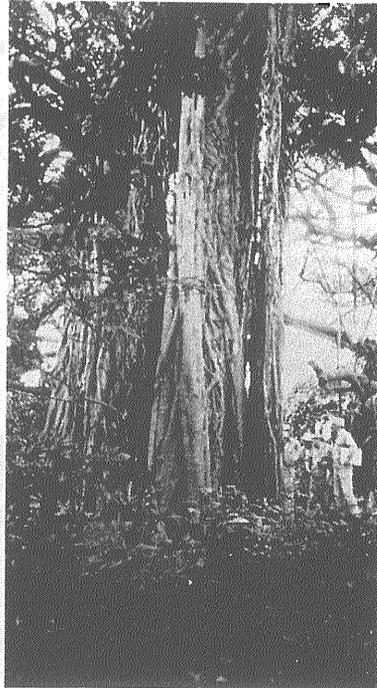
屋久電力 カーバイト工場



安房川支流 荒川アーチダム工事場



アコウ樹



がじゅまる樹



安房川 千尋発電所